<子育て文化協同>ベトナムスタディーツアー

ベトナム人の“生きている”エネルギーはどこから来るのか？

青木未知（協同総合研究所）

3月27日から4月2日までの1週間、「子育て文化協同全国世話人会」企画のベトナムスタディーツアー（代表　佐藤洋作氏）に参加しました。約1年前に不登校や引きこもりの子ども達が「NPO文化学習ネットワーク」のベトナムスタディーツアーに参加し、ストリートチルドレンの面倒を見ている「ベトナムの『子どもの家』を支える会（代表　小山道夫氏）」を訪問、ベトナムの子ども達と交流しました。私たちがベトナムへ出発する前に、1年前にスタディーツアーに参加した子ども達が感想を語ってくれました。彼らがベトナムで感じたのは、「食べ物が新鮮で、人々に活力があり、生きているエネルギーがものすごい」ということでした。

今回のツアーメンバーは26名で、幼稚園から大学の先生まで各界の教育関係者が揃いました。私は、日本の子ども達が強烈に感じた「生きているエネルギー」とはどのようなものなのか、それはどこから来るのだろうか、ということをテーマに旅に出発しました。

ベトナムの概要

ベトナムの正式名称は「ベトナム社会主義人民共和国」です。面積は日本の約0.9倍、人口は約8269万人(2004年)です。民族はキン族(ベト族)約90%を占めていて、そのほかに50以上の少数民族がいます。仏教徒が約8割を占めています。

人が見える街

ホーチミン市はとにかくバイクが大量に走っています。午後5時のラッシュアワーに向けてバイクがどんどん増えていきます。ヘルメットをかぶらず、2・3人乗りは当たり前。日本では考えられない交通状況で、規制の緩さに驚きました。こんなにたくさんの人がバイクに乗り、どこへ向かっているのだろうと不思議に思いました。

日本でおなじみのケンタッキーフライド

チキンやロッテリア、デパートもありました。しかし、日本のようにチェーン店やコンビニがたくさんあるわけではなく、個人商店のような小規模の店が多かったような気がします。歩いて物を売る人もいるし、道路でジュースやお菓子を売る人もいます。とくにフエという古代的な都市では、個人商

店ばかりでした。お店は、日本でいう八百屋さんのような形で、ドアがなくて道から気軽に品物がのぞける形式がほとんどです。

バスでホーチミン郊外を行くと、人々の生活が垣間見えました。ベトナムの男の人は職がないのか、数人で集まってお茶を飲んでいる姿が良く見られました。物売りは女性と子どもだけのようです。家は平屋で、道路に面して入り口が大きく開かれていました(どろぼうは入らないのでしょうか)。バスの中からは、お茶を飲んでいたり、ハンモックで寝ていたり、バイク修理をしていたりする様子が見えました。よく目についたのがバイク修理屋、食べ物や生活雑貨の店、赤いプラスチックの椅子とテーブルが置いている食堂です。どれも簡素なものですが、自分で店を持ちたくましく経営していました。しかし店番とは言ってもテレビを見ながらであったり、新聞を読みながらなので、生活と仕事が一体となっているようでした。

愛情と文化で育つ子ども達

フエでは、「子どもの家」を訪問しました。都内で小学校の教員をしていた小山道夫さんが、路上で暮らすベトナムの子ども達を助けたいと、教員を退職してたった一人でフエに来て、1995年に退職金をもとにストリートチルドレンの衣食住の面倒を見る施設を作ったことが始まりです。今では3歳から20歳までの63名の子ども達がここで暮らしています。ここでは、年上の子ども達が年下の子ども達の面倒をみて大きな家族のように暮らしています。ご飯は自分たちで作るので料理の腕は上達するし、人付き合いの方法も覚えるとのことでした。私たちが訪問した際には、子ども達がおいしいお昼ご飯でもてなしてくれました。

「子どもの家」では、子たちの非行化に悩まされた時期もあったそうです。小さいころはいい子なのに、思春期を迎えるとなぜ大変身してしまうのか。その答えは、子ども達は衣食住だけ提供していても育たないということでした。小山さんいわく、子どもが育つのには二つの大切な要素があります。

一つは「文化」。それぞれに1人ひとりの人生があり、子どもは文化・文明の中で手間暇かけて育つということを実感したそうです。そして小山さんは施設の中に「児童文化センター」をつくり、美術や音楽、日本語などを好きなときに自由に学べる環境を作りました。

もう一つは「愛情」。「子どもの家」の子ども達のデータを整理したら、非行化した子ども達の多くは、小さい頃から路上で生活するなど、幼少期に愛情を受けていないことが分かったそうです。子どもは、幼少期に自分だけを愛してくれる大人から何度も抱きしめられて愛情を感じ、育っていく。それは、多くの子どもに目を配らなければならない寮母さんや先生からは得られない愛情です。その為、なるべく片親や親戚がいる子どもは家から通わせようと、在宅支援を始めました。

小山さんの目標は、子ども達の自立、ベトナム人による「子どもの家を支える会」の自立です。ミシン縫製工場（計画中）やオートバイ修理工場、「子どもの家」の卒業生がつくった雑貨を販売する店や、フエで初めての日本料理店をつくり、子ども達が働いて自立できる環境を少しずつ作り出しています。

年間約1,500万円かかる維持費は主に日本の支援者からのものですが、ゆくゆくはそのお金をベトナムで作り出すことができるように、フエに日本語学校や日本料理店をつくってお金を生み出す仕組みも作りました。ベトナムの事務所の責任者にはベトナム人のバオ・ミンさんが就任しています。

「生きること」を学ぶ子ども達

ベトナムの子ども達を見て感じたことは、料理を作ったり小さい子の面倒を見たりと、生活する中で自然と「生きていく術」を身に付けていっているということです。ベトナムでは小学校でも落第があるので、勉強も真剣にやらなければ進級できません。社会制度や街の仕組みも日本のように整っていないので、自分たちであれこれやって生きていかなければなりません。しかし都内で生活する私にはすごくうらやましく思える面がありました。

年齢を超えて遊ぶ「子どもの家」の子ども達

ナムドン地方の山岳地帯にすむコツー族と（写真：小山さん提供）

別の日はナムドン県の山岳地帯の少数民族を訪ねたのですが、私たちが訪れた際、子どもから大人まで多くの村人が集まってくれました。

少なくとも「子どもの家」の子ども達や少数民族の子ども達には自分を支えてくれるコミュニティがあり、そこで多くの人とかかわり合いながら生活の術を習得していました。

果たして、日本の子ども達は日常で「生きること」を学んでいるのでしょうか。

帰国して感じたこと

貧しくても一生懸命に生きている国から豊かな日本に降り立ち、まず「保護されている」という安心感に包まれました。また、飛行機を降りてから空港に行くまでモノレールに乗り、「全てがきれいに整っている」ことを痛感させられました。フエの空港では大雨が降っていて、荷物がびしょびしょに濡れてしまったのですが、成田では飛行機から一歩も外に出ずに空港までたどりつける、そのギャップにまず驚きました。何の不自由もなくモノレールで空港まで連れて行ってくれる。確かに快適だけれど、ベトナム帰りの私には、過剰すぎる設備ではないかと思ったくらいです。それは、何もかもきれいに整い過ぎていて、何か透明の高い壁の中にいる感覚に覆われているようでした。これが、よく言われる日本社会の息苦しい原因なのではないかと感じました。

日本では、経済が発展して生活にほど遠い、あれば確かに便利だけど「あってもなくてもいいサービス、モノ」がたくさんあります。利用する側に立てば便利で快適だけれど、私達はそれを維持管理する必要があります。それが「仕事をする自分の役割」となって返ってくるのです。つまり、自分がいいサービスやより快適なものを求めれば求めるほど、仕事の領域ではそれを完璧に維持する必要が出てくるし、既に十分な生活インフラが整っている中でさらなる「便利な何か」を探し求めなければならないジレンマが出てきます。その中でさらに「自分を表現せよ」と求められます。その社会の息苦しさと、生活の中で「生きる」ということが身近に感じられない空間が、引きこもりに代表される不安定な子ども達を生み出しているのではないかと感じました。

ベトナムの家は道路に向かって建てられていて、バスの中からは家の前でバイクを修理している姿やハンモックで寝ている姿、食事をしていたりお茶をしていたり、ゲームをしている姿が良く見えました。道端では生活雑貨や果物などが売られていました。歩けば誰かしらいるし、何よりも「生活」が道にあふれ出ていました。

日本の家は1階は駐車場になっていたり高い塀に覆われていて人の姿は見えないし、誰が住んでいるか分からないし、約束をしなければお茶することも出来ません。私は都内に住んでいるから余計にそう感じます。

確かに小さい頃から仕事をしたり食べ物もろくに食べられない子ども達がいるのは問題であるし、その事実は認識しなればいけませんが、同時にベトナムが持っていて日本が持っていないものをたくさん感じました。それは少数民族のように生まれたときから自分の「居場所（＝団結したコミュニティ）」があり、頑張らなくても人とつなが

ることができる社会、社会が未整備だからこそたくましく生きていく力が自然と育つ社会、そして「生活」が身近にあふれている社会、そこにベトナム人の「生きているエネルギー」があるのだと思いました。

「ベトナム子どもの家を支える会」の小山さんは、近い将来日本で息苦しさを感じている子ども達を呼んで、6ヶ月～1年フエに住まわせるようなミニホテルをつくり、日本語学校や日本料理店のお手伝いをさせたいと語っていました。

日本は緻密に社会が組み立てられていて、それが普通のような感覚に陥ってしまいがちですが、今回の旅で、それが回りまわってくると社会人としての自分が苦しくなるということに気づいたので、今後はサービスに変に完璧さを求めず、気楽に対応していこうと思いました。

貧しい地域や「子どもの家」を訪問して、彼らと知り合った私が今後どう動いていくべきか。自分に重くのしかかった課題は、今後忘れずに考え実行していきたいと思います。

1 日の所得が 70 円以下の水上生活者の子どもが多い地域の小学校

資料：

ベトナムの「子どもの家」を支える会
（ＪＡＳＳ）代表　小山　道夫
ベトナム事務所 (THE OFFICE OF JASS)
事務所長　Ｂａｏ　Ｍｉｎｈ（バオ・ミン）
12 CHU VAN AN HUE VIETNAM
TEL 001-010-84-54-828177　FAX 001-010-84-54-828087
ＨＰ：http://www001.upp.so-net.ne.jp/jass/